

学 位 論 文 要 旨

氏 名 内藤 三和子

題 目 文学教育における演劇的手法に関する考察

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、文学教育における演劇的手法に関して、学習者が主体性をもちうるような効果的な実践は可能なのかを明らかにすることを目的とした。先行研究や論者の実践などから演劇的手法から得られる理解を示しながら、主体性の性質を考察した。また、効果的な演劇的手法には「対話」が関係することが考えられたため、「対話」のある演劇的手法について検証した。

第1章では戦後教育において演劇的手法がどのように考えられていたのかを整理考察した。占領期に始まった教育指導者講習会IFELの資料や、当時の文献、演劇教育史研究、戦後教科書などから考察した。戦後新教育の潮流において、演劇的手法は代替経験になるものとして推進されたが、アメリカの姿勢の変化も重なって占領期が終わるとその勢いは衰えることになった。国語科の教科書教材についてはその後昭和30年代まで演劇に関連した教材が見られた。その他、演劇教育運動や教育実践家を取り上げて整理し、演劇的手法の主体性にかかわる性質や「対話」のもつ可能性について考察した。

第2章では、経験主義単元学習の代表的な実践家である大村はまの劇化単元の全体像を示し、その変遷を考察した。文学教材の劇化単元である「ここにこう生きている少年少女」を取り上げ、学習者の学びの様相を示した。考察に際しては、学習者が作成した「学習記録」（鳴門教育大学付属図書館蔵）を中心的な資料として検証した。大村の劇化単元では後年になるに従って教材が多様になり、単元の構成では学習者に委ねていく特徴が見られた。単元「ここにこう生きている少年少女」では、作品には描かれていなかった新たな物語が創出された。新たな物語は、作品の理解を超えた批判的に読む力によってつくられた作品や、人物をよく理解した上でその人物が別の問題において生きる作品であり、学習者の主体性なくしては成立しない特徴が見られた。

第3章は日常性に基づく演劇表現が「対話」につながることを示した。演出家であり、教育実践家の竹内敏晴の文献から、演劇表現における身体性と日常生活における身体性を考察した。また、日常的な穏やかな生活場面においては「対話」のような複雑な思考が可能となることを示した。演劇は非日常的な場面を描く傾向が見られるが、非日常的な事件性を排した演劇もあり、チエーホフ、平田オリザ、小津安二郎を取り上げて、彼らの作品が日常性に徹していたことと、共通する作品の性質に「対話」があることを述べた。平田が書き下ろした教科書教材には「対話劇を体験しよう」があり、平田の舞台作品との共通点が見られた。平田の「対話劇」に取り組んだ論者の実践を通して、「対話」の場面では新しく情報がもたらされることが、会話と「対話」の違いを知ること、「対話」によって態度や問など発話に付随する情報に敏感になることが成果として得られた。

第4章では、文学教材の劇化実践の先行研究から共通して得られる理解を劇化における「学びの共通点」として整理した。次に演劇ワークショップを調査し、文学教材の劇化実践に資する力として、「学びの共通点」の他に、物語を多層的に読む力や、人物たちの共時的表現の理解、演劇が現実の理解に通ずるところから文学作品の価値を発見することなどを成果として示した。異なる思考で生きている人物たちそれぞれの思考を全体像を含めて理解するという「対話」の性質を見ることができた。この「対話」の性質が演劇的手法の効果的な学習を生み出すものと考えられ、教材「故郷」「少年の日の思い出」について「対話」を重視して劇化する実践を行い、複数の人物の思考を全体像から理解することを示した。

第5章では、劇化における「学びの共通点」を「対話」や「対話」のある演劇的手法にも共通するものとして再構成した。大村はまの劇化指導や、平田オリザの教材「対話劇を体験しよう」の実践が「学びの共通点」の観点から成果があったことを示した。「対話」を重視した劇化実践は、精神医療、臨床心理学の分野で行われているオープンダイアログとの共通点が見られた。それは「対話」に参加する主体性と、「対話」参加者の個々の考えを知り、その全体像を理解する思考過程が「対話」の参加者自身の主体性を育むものだという点である。ここに学習者が主体性をもちうる演劇的手法の形を見ることができた。現実生活における「対話」と「対話」のある演劇的手法の違いは、演劇では決裂までもが「対話」の舞台上で冷静に読み取ることができる点である。これらを「演劇的手法を用いることで生じる『対話』のメカニズム」として図で示した。

今後の課題としては、「対話」のある演劇的手法の実践を他の文学教材で取り組み、作品に描かれた人物関係を「対話」を通してより明確なものにすることが挙げられる。すなわち、言語を介した学習によって現実生活と文学という虚構の世界との関係を強固なものとし、学習者の主体性を育む思考過程をより確かなものへと究明することである。